

## 詩篇114－118篇 「エジプト・ハレル」

### 1A 自然に介入する贖い 114

### 2A 異教徒の中での証し 115

1B 異教徒の嘲り 1－8

2B 主への信頼 9－18

### 3A 祈りを聞かれる主 116

1B 死からの救い 1－8

2B 主への誓い 9－19

### 4A 全ての国々の賛美 117

### 5A 国々からの救い 118

1B 御恵みと民の信頼 1－9

2B 国々の断ち切り 10－18

3B メシヤの入城 19－29

## 本文

私たちは、114 篇から読んでいきますが、113 篇から「ハレル詩篇」を読み始めています。118 篇まで続きます。これは、エジプトからイスラエルが出てきたことを記念する賛歌であり、ユダヤ人の三つの祭り、過越の祭り、五旬節、そして仮庵の祭りで歌うものです。113 篇においては、とこしえの御名を持っておられる主、すべての国々の上におられる主が、弱い者、貧しい人のところまで降りて来てくださったということ、そしてその彼らを君主と共に王座に着かせるという歌の内容でした。これは、出エジプトにおいて、奴隷であったイスラエル人が国々の上に高く上げられることを約束されている言葉です(申命 26:19)。

そしてハレル詩篇は、後に来られるキリストの働きを予め示す、メシヤ詩篇ともなっています。113 篇では神がキリストによって、心の貧しき者のところまで来てくださいました。主は、弱い者、取るに足りない者、愚かな者を選ばれました。そして、神の子としてくださり、神の国を相続する者としてくださいました。後の世において、君主と同じ座に着かせられるのです。

### 1A 自然に介入する贖い 114

114:1 イスラエルがエジプトから、ヤコブの家が異なることばの民のうちから、出て来たとき 114:2 ユダは神の聖所となり、イスラエルはその領地となった。114:3 海は見て逃げ去り、ヨルダン川はさかさに流れた。114:4 山々は雄羊のように、丘は子羊のように、はねた。

114 篇は、エジプトから民を連れ出される時、主が自然に介入して下さる姿を描いています。エジプトから出て、そしてユダで神殿礼拝をすることができ、イスラエルを相続地としてくださいました。

そして3節は、エジプトを出る時に紅海が分かれたことと、約束の地に入る時のヨルダン渡河の出来事です。そして4節は、シナイ山において主ご自身が天から降りて来てくださった時に、山やその一帯が震えた時の話です。

114:5 海よ。なぜ、おまえは逃げ去るのか。ヨルダン川よ。なぜ、さかさに流れるのか。114:6 山々よ。おまえはなぜ雄羊のようにはねるのか。丘よ。なぜ子羊のようにはねるのか。114:7 地よ。主の御前におののけ。ヤコブの神の御前に。114:8 神は、岩を水のある沢に変えられた。堅い石を水の出る泉に。

なぜ、これらの自然現象が起こるのか？答えは、「ヤコブの神の前で、地が慄いているから。」ということです。主が約束の民のために、海や川、山や丘を動かしておられるということです。そして、彼らが荒野で旅をしている時に、主は彼らのために岩から水も出してくださっています。つまり、主は、ご自分が万物を造られて、その筆頭に人を造られ、人に地を従えるようにされました。しかし、人が罪を犯したのでそれゆえ地も呪われたものとなりました。しかし、神が贖いの業を行われる時は、人を救いながら、これら地上にあるものをも揺り動かしてくださるということです。神が人と関わられる時に、自然もそれに呼応するということです。

キリストが贖いの業を遂げられる時、そこには自然も深く関わりました。主が十字架に付けられて正午になった時に全地が暗くなりました。それはなぜか？神がご自身の怒りを示されていたからです。主が地上にある罪に対して怒りを発せられる、終わりの日、主の日において、預言者アモスはこう言いました。「アモス 5:20-21 ああ、まことに、主の日はやみであって、光ではない。暗やみであって、輝きではない。わたしはあなたがたの祭りを憎み、退ける。あなたがたのきよめの集会のときのかおりも、わたしは、かぎたくない。」この通りに、十字架は過越の祭りの時に起こり、そして全地が暗くなりました。そして主が息を引き取られた時に、神殿の幕が上から下に真っ二つに裂かれ、「地が揺れ動き、岩が裂けた。(マタイ 27:51)」とあります。そして復活の時もそうです、大地震が起こりました。「さて、安息日が終わって、週の初めの日の明け方、マグダラのマリヤと、ほかのマリヤが墓を見に来た。すると、大きな地震が起こった。それは、主の使いが天から降りて来て、石をわきへころがして、その上にすわったからである。(同 28:1-2)」このように、主は贖いの業を行われる時に地を慄かせるという働きを行われます。

ですから私たちは、主がご自身の贖いの業を推進される時に、キリストの死とその復活の力を私たちに示されます。そして十字架と復活の御力を示される時に、生活の中で、社会の中で振動を起こしていただきます。これまではびくともしなかった事柄が、神の奇跡的な介入によって動きまわります。そのことを期待していきましょう。

## **2A 異教徒の中での証し 115**

そこで 115 篇では、この主に信頼して生きていきなさいという呼びかけを、異教徒の仕えている

神々と対比して歌っています。

### 1B 異教徒の嘲り 1-8

115:1 私たちにではなく、主よ、私たちにではなく、あなたの恵みとまことのために、栄光を、ただあなたの御名にのみ帰してください。115:2 なぜ、国々は言うのか。「彼らの神は、いったいどこにいるのか。」と。115:3 私たちの神は、天におられ、その望むところをことごとく行なわれる。115:4 彼らの偶像は銀や金で、人の手のわざである。115:5 口があっても語れず、目があっても見えない。115:6 耳があっても聞こえず、鼻があってもかげない。115:7 手があってもさわれず、足があっても歩けない。のどがあっても声をたてることもできない。115:8 これを造る者も、これに信頼する者もみな、これと同じである。

イスラエルがエジプトを出てから荒野を旅して、それから約束の地に入ります。そこには、いつも国々、つまり異教徒たちに囲まれています。彼らには、目に見える神がありました。そして、それらの神々は、農耕の神であったり、快樂の神であったり、富の神であったり、極めて単純です。目の前にある必要や欲求を即座に満たしてくれそうな誘惑を持っている神々です。その中でイスラエルが生きなければいけませんでした。そして午前礼拝で学んだように、それらの本質は自分を高めるためのもの、自己実現です。その反対に、まことの神への礼拝というのは、神実現です。神の御心になること、神の国が臨むこと、神の栄光が与えられることを強烈に願います。私たちは、自分を捨てて、ただ神のみに満たされていきことを願います。

そこで思い出さなければいけないのは、偶像は「空しい」ということです。見た目は、いろいろなことを約束してくれますが、実体がないのです。箱があっても中身がないのです。そして、それを追い求めればそれだけ、自分自身も空しくなります。自分にも命がなくなるのです。神がお造りになられた、そのありのままのあなたが用いられるのに、世の約束するものを追い求めることによって、自分ではないものになろうとして、その結果、自分自身を失います。「ルカ 17:33 自分のいのちを救おうと努める者はそれを失い、それを失う者はいのちを保ちます。」

### 2B 主への信頼 9-18

115:9 イスラエルよ。主に信頼せよ。この方こそ、彼らの助け、また盾である。115:10 アロンの家よ。主に信頼せよ。この方こそ、彼らの助け、また盾である。115:11 主を恐れる者たちよ。主に信頼せよ。この方こそ、彼らの助け、また盾である。115:12 主はわれらを御心に留められた。主は祝福してくださる。イスラエルの家を祝福し、アロンの家を祝福し、115:13 主を恐れる者を祝福してください。小さな者も、大いなる者も。

イスラエルに対しては、「主に信頼せよ」と呼びかけます。目に見えないけれども、それでも期待するのが信仰です。目に見えないからこそ信じます。目に見えるのでは、信仰ではありません。

そして、「イスラエル」と「アロンの家」、そして「主を恐れる者」と三つに分けています。「イスラエル」は一般のイスラエルの民のことです。「アロンの家」は、祭司職の人々です。旧約の中では、祭司と民の区別がありました。それぞれの戒めが与えられていました。けれども、主に信頼することにおいては、それぞれに与えられた分を果たすのですから、何ら区別がありません。新約においては、すべての人がキリストに対して祭司であることが教えられています。もし、主に信頼することは牧師や一部の指導者の人たちに任せておけば大丈夫だ、と置いていたら、それは大間違いです。一人一人が、御霊によって主から聞き、主に信頼する責務があるのです。

そして「主を恐れる者」と言っています。これは大事ですね、イスラエルであっても主を恐れていなければ、えこひいきなく罰せられます。祭司だからと言って、主を恐れている訳でもありません。サムエル記第一に出てくる祭司エリの息子二人は、よこしまなものでした。主を恐れているからこそ、真のイスラエルであり、また真の祭司なのです。そして、「小さな者も、大いなる者も。」祝福されると書いてあります。これは、分け隔てなく祝福してくださるということです。大いなる者だけが祝福されて、小さな者はそうではないと私たちは思ってしまいます。しかし、主にはえこひいきがありません。何万人を神に立ち返らせた預言者サムエルは偉大ですが、その子を主にあって育て上げた母ハンナは同じように偉大です。主の前では同じ祝福を受けています。

115:14 主があなたがたをふやしてくださるように。あなたがたと、あなたがたの子孫とを。115:15 あなたがたが主によって祝福されるように。主は、天と地を造られた方である。115:16 天は、主の天である。しかし、地は、人の子らに与えられた。115:17 死人は主をほめたたえることがない。沈黙へ下る者もそうだ。115:18 しかし、私たちは、今よりとこしえまで、主をほめたたえよう。ハレルヤ。

初めに、主は天におられるという告白をしていました。けれども、ここで主が天と地を造られた方であるという告白が変わっています。それは、主がご自分の御心を実行されようとする時に、主は人を通してそれを行なわれるということです。地を従わせるために、人を造られたことを神は創世記1章で宣言されていました。人を通して、この地上でご自分の願われることを行われようとしています。だから、私たちは祈るのです。私たちが祈ることによって、神と心をついにし、そして一つになった心を通して、神はご自分の国を広げられるのです。そして私たちが地上で行なう、その責務とは何でしょうか？その一つが、ここにあるように「主をほめたたえる」ことでもあります。主が自分の中で、また自分を通して行ってくださったこと、その主の御業を見て、この方をほめたたえ、この方に感謝を捧げることが私たちの務めです。

### **3A 祈りを聞かれる主 116**

こうして私たちは、主の贖いの働きのいろいろな面を見てきました。一つは、私たちのところまで降りて来てくださった方。そして次は、自然をも動かして贖いを果たしてくださる方。そして次は、目に見えなくとも、主は必ずご自分の望まれることを行い、それを、主を恐れる者に見せてくださる方

であることを見ました。次は、祈りを聞かれ、私たちを救ってくださる方として現われます。おそらく時は、エジプトでの奴隷状態の時に、主が彼らの叫びを聞かれて、それで贖い出された時のことを話していると思われます。

### 1B 死からの救い 1-8

116:1 私は主を愛する。主は私の声、私の願いを聞いてくださるから。116:2 主は、私に耳を傾けられるので、私は生きるかぎり主を呼び求めよう。

すばらしい表明です、「私は主を愛する。」とあります。これは、単に愛しているという気分になっているというものではありません。決意表明であり、どんなことがあっても私はこの方を最も大切にしますという優先順位も含みます。主が復活後に、ペテロたちが漁に行き、それでイエス様が網を降ろしなさいと言われて大漁だった時に、主はペテロに、「あなたは、これらのものより、わたしを愛しますか。(ヨハネ 21:15 参照)」と言われました。単なる好きだということではなく、愛しているかという問いかけです。

そして、主を愛しているという表明の理由もすばらしいです。「主は私の声、私の願いを聞いてくださるから。」というものです。ヨハネ第一の手紙には、「1ヨハネ 4:10 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」とあります。神が愛してくださいました、だから愛しています。けれども、ここでは主が祈りを聞いてくださったというその体験から、深い部分で主を愛することができます。イエス様は言われました。「ヨハネ 14:13-15 またわたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは何でも、それをしましょう。父が子によって栄光をお受けになるためです。あなたがたが、わたしの名によって何かをわたしに求めるなら、わたしはそれをしましょう。もしあなたがたがわたしを愛するなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。」ぜひ、この関係を深めてください。

116:3 死の綱が私を取り巻き、よみの恐怖が私を襲い、私は苦しみと悲しみの中にあった。116:4 そのとき、私は主の御名を呼び求めた。「主よ。どうか私のいのちを助け出してください。」116:5 主は情け深く、正しい。まことに、私たちの神はあわれみ深い。116:6 主はわきまえない者を守られる。私がおとしめられたとき、私をお救いになった。

この作者は死にかけた時に主を呼び求め、助け出されました。それで主の憐れみを体験しました。ここで、その苦しみが自分の愚かさや罪に関係していたものと思われます。「わきまえない者を守られる」と告白しているからです。主が私たちの祈りを聞かれるのは、もっぱら神の憐れみと恵みによるものであって、私たちが正しいからではありません。あの取税人とパリサイ人が神殿のところで祈ったというイエス様の話を思い出してください。自分が正しいとしているパリサイ人の祈りではなく、「神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。(ルカ 18:13)」と言った取税人の祈りを神は聞かれました。

116:7 私のたましいよ。おまえの全きいこいに戻れ。主はおまえに、良くしてくださったからだ。  
116:8 まことに、あなたは私のたましいを死から、私の目を涙から、私の足をつまずきから、救い出されました。

主がこれほど良くしてくださり、祈りを聞いてくださるのですから、いつも自分の魂は、全き憩いに戻ればよいのです。祈りこそ、自分の思い煩いを主に持っていくことのできる場所であり、魂に神の平安が与えられる場所であるのです。「ピリピ 4:6-7 何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。」

## 2B 主への誓い 9-19

そして、祈りを聞かれて救われた後に、自分が主に対して立てる誓いを 9 節から表明しています。

116:9 私は、生ける者の地で、主の御前を歩き進もう。116:10 「私は大いに悩んだ。」と言ったときも、私は信じた。116:11 私はあわてて「すべての人は偽りを言う者だ。」と言った。

本当は死んでも全然おかしくなかったこの命が活かされていることを思って、与えられた命を、主の御前を歩き進むのに費やしていこうという決心です。この地で生きていく時に、大いに悩むことがあります。それでも、「私は信じた」と言っています。信じるのです。時に、思いが乱れ、悩み、人間不信に陥ることもあります。「すべての人は偽りを言う者だ。」という言葉です。けれども、主が良くしてくださっています。主の良さは、人の不真実よりもまさるのです。

116:12 主が、ことごとく私に良くしてくださったことについて、私は主に何をお返ししようか。  
116:13 私は救いの杯をかかげ、主の御名を呼び求めよう。116:14 私は、自分の誓いを主に果たそう。ああ、御民すべてのいる所で。116:15 主の聖徒たちの死は主の目に尊い。

祈りが聞かれて、救われた彼が、「生きている限り、主の御前を歩むもう」と決意しましたが、ここでは「救いの杯をかかげよう」と決めています。自分が救われたことを祝っていいこうとしています。過越の祭りにおける食事では、杯からぶどう酒を飲みます。それは、エジプトから出てきたことを祝う杯です。同じように私たちの救われた生活とは、罪から、そしてその死の恐怖から救われたことを大いに掲げる生活であります。

ところで、興味深いのは「私は主に何をお返ししようか。」という言葉です。私たち日本人は、「お返し」の文化がありますね。受けた恵みに対して、お返しをしないといけないという文化です。これは日本だけでなく他の国にもあるのですが、日本の場合は恵みをしっかり受け取ることができていません。何かをしていただき、その恵みをしっかりと受けとめて、それで魂が解放され、喜ぶという

ところまでいかないといけません。

そしてさらに興味深いのは、「主の聖徒たちの死は主の目に尊い。」という言葉です。死から救われたことを今、喜んでいるのに、どうしてここで聖徒たちの死について話しているのでしょうか？これは、ある注解で説明されていたことが適切だと思います。こう書いてありました。「神を愛し、神を信頼しようとする者を神はそうやすやすと死なせない。その死には大きな価値と意味があるようにされるという意味合いがあるように思います。」主は、時が来るまで必ず守ってくださいます。けれども、死ぬことを許されるなら、それは主の目に尊いものとして死なせる、その時を定めておられるということです。

イエス様が、その人生を全うされました。ヨハネの福音書を読むと、イエス様は「わたしの時はまだ来ていない。」という言葉が語られました。そして殺される危険もあっても、守られました。「ヨハネ 7:30 そこで人々はイエスを捕えようとしたが、しかし、だれもイエスに手をかけた者はなかった。イエスの時が、まだ来ていなかったからである。」とあります。けれども、主は死なれる時には死なれました。しかしそれは、意図せぬものではなく、むしろ聖書の預言が成就するためのものでした。御父の定められた時に死なれたのであって、その死は尊いものでした。主に従う者は、同じように主の目に尊い死を遂げることができます。

116:16 ああ、主よ。私はまことにあなたのしもべです。私は、あなたのしもべ、あなたのはしための子です。あなたは私のかせを解かれました。116:17 私はあなたに感謝のいけにえをささげ、主の御名を呼び求めます。

エジプトにおいて奴隷の枷をはめられていたのですが、主がそれを解かれました。したがって、今の自分は主のしもべであり、はしためであると言っています。これも興味深いです、私たちは自由にされるということは、すべてのものから自由にされると思っています。いいえ、人間は根本的に何かに従属しているのです。もし神から自由にされるなら、自分の欲望によって、また偶像によってがんじがらめになるのです。「ローマ 6:17-18 神に感謝すべきことには、あなたがたは、もとは罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの規準に心から服従し、罪から解放されて、義の奴隷となったのです。」私たちの主イエス・キリストこそ、もっとも自由な方でありました。その自由は、ご自分の父にすべてをお任せになり、御父の語られることを愛の中で守っておられたからに他なりません。

そして死から救われたことについて、三つ目の誓いを立てています。「感謝のいけにえをささげる」ことです。一つ目は、主の御前を歩むこと、二つ目は、救いの杯を掲げて御名を呼び求めること、そして三つ目は、感謝を捧げることです。そして続けて、主を呼び求める、すなわち祈っていく生活を送っていきます。

116:18 私は自分の誓いを主に果たそう。ああ、御民すべてのいる所で。116:19 主の家の大庭

で。エルサレムよ。あなたの真中で。ハレルヤ。

この詩篇の著者は、個人の体験を話しているのですが、それを神の民の前でも明らかにしています。個人の体験であると同時に、神の民の代表として語っている節もあります。これはその通りですね、私たちは主の救いを個々人が受けました。その良くてくださったことは、実は他の仲間もそれぞれが神から受けたものがあって、それを共有しているのです。そして、仲間にその恵みを分かち合います。私たちの中に、神の良くてくださったことを分かち合う務めがあります。

#### **4A 全ての国々の賛美 117**

次は、詩編の中で、いや聖書の中でもっとも短い章となっています。

117:1 すべての国々よ。主をほめたたえよ。すべての民よ。主をほめ歌え。117:2 その恵みは、私たちに大きく、主のまことはとこしえに至る。ハレルヤ。

エジプトから救い出されたイスラエルの民が、国々から救われることを歌っている中で、ここでは「すべての国々よ。主をほめたたえよ。」と歌っています。国々こそが、「おまえの神はどこにいるのか。」と嘲り、また自分たちを取り囲んで滅ぼそうとするのです。しかし、その国々が神をほめたたえているのです。ここに神の心があります。それは、「あなたがたの敵を愛しなさい。祝福するのであって、呪うものではありません。敵のために祈りなさい。」というイエス様の言葉です。それから、キリストが私たちの平和であり、二つのものを一つにして隔ての壁を打ちこわすというメッセージです。

バビロンからユダヤ人は帰還して、律法に立ち上がる運動を起こしました。エズラ記とネヘミヤ記でそれを読むことができます。けれども長年の異邦人の虐げによって、自分たちを律法によって守ろうとしました。そして、いつの間にか異邦人から壁を作っていました。それが新約時代のユダヤ人です。ですから、彼らが異邦人と関わりを持つことは、どうい受け入れがたいことでした。しかし、神は律法をそのようなことのために彼らに与えられたものではありません。彼らが主を神として生きていく中で、国々もまたイスラエルの神をあがめるようになるため、つまり宣教の使命がイスラエルにはあったのです。そしてそれを可能にしたのは、ユダヤ人のためだけでなく、異邦人のためにも流されたキリストの血です。パウロは、自分が異邦人への使徒となったことについて、ここ詩篇 117 篇の箇所を引用して、ローマにいるクリスチャンたちに説明しました(ローマ 15:11)。

私たちは、ゆえにこの難しい課題に取り組んでいます。それは、キリストにある聖さを保ちながら、なおのこと神に反抗している人々に愛の手を差し伸べることです。神に敵対している人々が、キリストの愛を受けて、悔い改めることを願って、福音によって届こうとすることです。罪を憎み、なおのこと罪人を愛されるキリストの愛に満たされることです。キリストは医者としてこの世に来られましたが、それは罪人がそのままの姿でいることを願っておらず、悔い改めて癒されるために来られました。そして、かつて神の敵であった者たちが、いまや神をほめたたえるようにするのです。



すべての国々が主をほめたたえるようになるのは、神の恵みとまことがあるからだ 2 節にあります。イエス・キリストこそが、恵みとまことに満ちた方です。「ヨハネ 1:14 ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。」

### **5A 国々からの救い 118**

そしてハレル詩篇の最後になります。これまでのハレル詩篇が、エジプトから出て、荒野の旅で守られ、約束の地に着くということが背景にありました。同時に、キリストがこの世に来られて、人々が救いの喜びに預かり、福音が異邦人にも届いていくという働きも示していました。最後の詩篇は、仮庵の祭りに深く関わっています。仮庵の祭りでは、荒野の旅を終えて無事に約束の地に入ることを記念するものです。そしてイスラエルの救いについては、敵から救われて、神の国の中に入る、その救いの完成を表しています。

しかし、その救いの完成において大きな逆説的なことが起こったことをこの賛歌の最後で教えています。「家を建てる者が捨てた石が、礎の石となった。」という言葉です。イエス様が十字架に付けられる時に、その最後の週にユダヤ人指導者らと議論しておられた時に引用されたのが、子のメシヤ詩篇でした。

### **1B 御恵みと民の信頼 1-9**

118:1 主に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで。118:2 さあ。イスラエルよ、言え。「主の恵みはとこしえまで。」と。118:3 さあ。アロンの家よ、言え。「主の恵みはとこしえまで。」と。118:4 さあ。主を恐れる者たちよ、言え。「主の恵みはとこしえまで。」と。

115 篇と同じように、イスラエルに対して、アロンの家に対して、そして主を恐れる者に対して、呼びかけています。「主の恵みはとこしえまで」と歌わせています。とこしえまで続く、主の恵みです。私たちがキリストが成し遂げてくださった、十字架と復活の御業は、天においても、そして新天新地においてもとこしえまで、その恵みを歌います。

118:5 苦しみのうちから、私は主を呼び求めた。主は、私に答えて、私を広い所に置かれた。  
118:6 主は私の味方。私は恐れない。人は、私に何ができよう。118:7 主は、私を助けてくださる私の味方。私は、私を憎む者をものもししない。118:8 主に身を避けることは、人に信頼するよりもよい。118:9 主に身を避けることは、君主たちに信頼するよりもよい。

117 篇にある、主に呼び求めることによって、主が助けてくださるというその救いを今、喜んでいきます。これまでイスラエルが、他の国々に抛り頼む時はずっと抑圧されてきて、しかし主に立ち帰る時には主が助けてくださいました。それで、人ではなく、君主ではなく、主に信頼することの幸いを経験しました。主は私たちに対しても、このようにしてくださいます。私たちが、人ではなく、ただ

主を神としていくために、人が頼りにならないということを教育されます。

## 2B 国々の断ち切り 10-18

118:10 すべての国々が私を取り囲んだ。確かに私は主の御名によって、彼らを断ち切ろう。  
118:11 彼らは私を取り囲んだ。まことに、私を取り囲んだ。確かに私は主の御名によって、彼らを断ち切ろう。118:12 彼らは蜂のように、私を取り囲んだ。しかし、彼らはいばらの火のように消された。確かに私は主の御名によって、彼らを断ち切ろう。118:13 おまえは、私をひどく押して倒そうとしたが、主が私を助けられた。118:14 主は、私の力であり、ほめ歌である。主は、私の救いとなられた。

イスラエルは、すべての国々から攻められます。それが終わりの日に起こることとして、聖書は預言しています。「ゼカリヤ 12:2-3 見よ。わたしはエルサレムを、その回りのすべての国々の民をよめかす杯とする。ユダについてもそうなる。エルサレムの包囲される時に。その日、わたしはエルサレムを、すべての国々の民にとって重い石とする。すべてそれをかつぐ者は、ひどく傷を受ける。地のすべての国々は、それに向かって集まって来よう。」その時にキリストが戻ってこられて、イスラエルのために戦い、彼らは救われるのです。

そこで、ここでその国々を心の中で断ち切る祈りを捧げています。八方塞がりでどうしようもない時に、断ち切って、主が自分を救ってくださることを祈るのです。そして事実、主が戦ってくださり、勝利して下さいます。おそらくイエス様のこのような祈りを十字架上で捧げられたのではないかと思います。ローマ兵に取り囲まれました。ヘロデにも憎まれました。そしてユダヤ人の宗教指導者のねたみを買われました。このように八方塞がりであった時に、その関係を断ち切り、そしてただ父なる神だけに抛り頼み、息を引き取られました。そしてその祈りは復活という形で救われました。

118:15 喜びと救いの声は、正しい者の幕屋のうちにある。主の右の手は力ある働きをする。  
118:16 主の右の手は高く上げられ、主の右の手は力ある働きをする。118:17 私は死ぬことなく、かえって生き、そして主のみわざを語り告げよう。118:18 主は私をきびしく懲らしめられた。しかし、私を死に渡されなかった。

イスラエルが大患難を終わりの時に通り、懲らしめを受けたけれどもそれでも主の力ある御手で救い出してくださったことを歌っています。死ぬことなく、かえって生きることができたと言っています。そしてこれは、イエス様の復活も預言しているのかもしれませんが、イエス様は自分の罪のために懲らしめられたのではありませんが、私たちの罪のために懲らしめられました。そして、十字架で死んで終わることはありませんでした。よみがえられました。

## 3B メシヤの入城 19-29

118:19 義の門よ。私のために開け。私はそこからはいり、主に感謝しよう。118:20 これこそ主の

門。正しい者たちはこれよりはいる。

ここから、重要なメシヤ預言の部分に入ります。これは、神殿のある敷地の門のことです。エルサレムの門のことです。イスラエルの民が、仮庵の祭りを行なう時にシロアムの池で水を汲んで、それを行進して上っていきます。それから門に入って、神殿の祭壇の近くで水を流します。それは、神が荒野で水を備えてくださったことを喜ぶためです。その門を通る時に、それが「義の門」であり、主に感謝して入るのです。

そして、これはメシヤご自身がエルサレムに戻ってこられることの預言であります。エゼキエル書で、主の臨在が聖所から離れて、そして東門から出ていき、オリーブ山に留まり、それからオリーブ山から離れていきました。そして、神殿が回復される時には栄光の臨在が東門から戻ってきて、聖所に入っていきます。同じように、イエス様はオリーブ山から昇天されました。神の栄光がそこで離れました。しかし終わりの日には、オリーブ山の上に立たれます。そして神殿を再建され、その中にご自身が入っていかれます。

したがって、イエス様がエルサレムに入城された時のことを思い出してください。彼らが、この期待をもってイエス様の入城を迎え入れ、歓喜したのです。「マタイ 21:7-9 そして、ろばと、ろばの子とを連れて来て、自分たちの上着をその上に掛けた。イエスはそれに乗られた。すると、群衆のうち大ぜいの者が、自分たちの上着を道に敷き、また、ほかの人々は、木の枝を切って来て、道に敷いた。そして、群衆は、イエスの前を行く者も、あとに従う者も、こう言って叫んでいた。「ダビデの子にホサナ。祝福あれ。主の御名によって来られる方に。ホサナ。いと高き所に。」こ「ホサナ」という叫び声は、25 節に出てくる「どうぞ救ってください。」という言葉そのものです。彼らは、メシヤが来られてエルサレムに入られて、そして自分たちを取り囲む国々、すなわち当時はローマですが、彼らをメシヤが断ち切り、それで主が彼らを救ってくださると思っていたのです。

ところが、歴史において至上最大のパラドックス、逆説が起こります。118:21 私はあなたに感謝します。あなたが私に答えられ、私の救いとなられたからです。118:22 家を建てる者たちの捨てた石。それが礎の石になった。118:23 これは主のなさったことだ。私たちの目には不思議なことである。

家を建てる者たちが捨てた石が、それが礎石、あるいは隅石となった、ということです。ソロモンの神殿建設で、ある逸話があります。これは本当かどうか分かりませんが、興味深い逸話です。ヘロデの建てた神殿でもそうですが、積み上げる石は、接着材等は使用しませんでした。石切り場で正確に切ったので、ぴったりとはめることができるので、現場ではただ積み重ねていだけでした。列王記第一 6 章 7 節にこう書いてあります。「神殿は、建てる時、石切り場で完全に仕上げられた石で建てられたので、工事中、槌や、斧、その他、鉄の道具の音は、いっさい神殿の中では聞かれなかった。」驚くべきことですね。けれども、ヘロデ神殿の跡を見ると、石と石の間はナイ

フも入れることのできないほど精密に重なっています。

それで、秩序をもって、正確にどの石がどこに行くのかを彼らは知っていました。ところが、一つ、どこにはまるのか、分からない石がありました。それで、仕方がないからそこら辺に捨てていました。ところが、神殿も土台が敷かれて、壁と壁をつなぎ合わせるのに非常に重要な、隅石を置く時になりました。ところが、見当たりません。石切り場に問い合わせたところ、「もう送った」というのです。そうです、どこにはまるか分からずに、捨ててしまった石が、実は隅石だったという逸話です。

これが本当の話かどうかは分かりませんが、けれども、意味している所はこのとおりです。この箇所を、イエス様も、また使徒ペテロも引用して、神の家を霊的に立てているはずのユダヤ人指導者によって、メシヤであるイエスが彼らに拒まれ、捨てられてしまうことを教えられました。イエス様がエルサレムに入城されて、それで神殿にいるユダヤ人指導者に「何の権威によってこんなことをしているのか。」と問い質されて、そしてイエス様はある譬えを話されました。ぶどう園の農夫たちの話です。主人が収穫を得るために、しもべを送ったところ彼らを袋叩きにしたり、殺したりしました。それで主人は、「私の息子なら敬ってくれるだろう。」とあって送ったところ、「あれは跡取りだ。さあ、あれを殺そうではないか。そうすれば財産はこちらのものだ。」と言って、彼を捕まえてぶどう園の外に投げ捨てました。そして、この箇所を引用されたのです(マルコ 12:1-12)。

そして使徒ペテロが、足なえの男をイエスの御名によって立たせたことによって、ヨハネと共にユダヤ当局に捕えられ、サンヘドリンで尋問を受けた時に、このように大胆に宣言しました。「使徒 4:10-12 皆さんも、またイスラエルのすべての人々も、よく知ってください。この人が直って、あなたがたの前に立っているのは、あなたがたが十字架につけ、神が死者の中からよみがえらせたナザレ人イエス・キリストの御名によるのです。『あなたがた家を建てる者たちに捨てられた石が、礎の石となった。』というのはこの方のことです。この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。」

118:24 これは、主が設けられた日である。この日を楽しみ喜ぼう。

主が、メシヤが捨てられる日を設けられている、あるいは定めておられるということであり、これはダニエル書 9 章に書かれていることです。24 節から、ユダヤの民と聖なる都については七十週が定められていて、七週と六十二週の後、油注がれた者が断たれるとあります(26 節)。「週」とは七年間のことです。そうすると、七週と六十二週というのは、483 年になります。七十週という期間は、「引き上げてエルサレムを再建せよ、という命令が出てから」とあります(25 節)。それはネヘミヤ記 2 章 1 節に、ペルシヤのアルタシャスタ王がユダヤ人の総督ネヘミヤに出した命令で、はっきりと紀元前 445 年のニサンの月とあります。今の暦では 3 月 14 日だそうです。それから、483 年後にメシヤが来るという預言です。

これを計算した学者がいます。一年を 360 日にすると、紀元後 32 年 4 月 6 日ということです。そしてルカ 3 章 1 節に、イエス様が公生涯を始められた時が皇帝テベリオの治世第 15 年とあります。それが紀元後 28 年です。イエス様の公生涯には、四つの過越の祭りがあったそうです。つまり三年の公生涯で、イエス様が十字架に付けられたのは過越の祭りの日なので、当時の日付では 4 月 10 日だったそうです。それから四日戻った日が 4 月 6 日です。主の十字架の日は金曜日と言われていますが、ここでは木曜日の計算のようです。したがって、四日前というと日曜日であり、それは、イエス様がエルサレムに入城された、棕櫚の日と呼ばれる時であります。つまり、この計算では一日も変わらず、預言が成就したことになります。

イエス様は、その時まではご自身がメシヤの喝采を受けるのを拒まれていました。ヨハネの福音書によれば、「わたしの時はまだ来ていない。」という言葉が使われました。ごく少数の人には明かされました。例えば、サマリヤの女に対してです。そして、ピリポ・カイザリヤにおいて弟子たちに、「あなたがたは、わたしを誰だと思えますか。」と尋ねられ、ペテロが「生ける神の御子キリストです。」と答えたので、それは天からの啓示であると言って祝福されましたが、ご自身がキリストであることを誰にも言うてはならないと戒められました。けれども、エルサレムに入城される時は、公にメシヤであることの喝采を受けられたのです。パリサイ人が、「お弟子たちをお叱りください。」と言ったところ、イエス様は、「もしこの人たちが黙れば、石が叫びます。(ルカ 19:40)」と言われました。このすごい預言の成就です。

118:25 ああ、主よ。どうぞ救ってください。ああ、主よ。どうぞ栄えさせてください。118:26 主の御名によって来る人に、祝福があるように。私たちは主の家から、あなたがたを祝福した。

群衆や弟子たちが叫んだ言葉、「ホサナ」はこの 25 節です。その後で、26 節はメシヤの到来に対する歓喜のことばです。しかし、イエス様は神殿の境内にいるユダヤ人指導者たちに、先ほどの家を建てる者たちの捨てる石が、礎の石となったという御言葉を引用し、そして彼らのご自身をメシヤとして受け入れないことに対して、神の裁きがあることを宣言されました。祝福ではなく、嘆きがやってきます。「マタイ 23:37-39 ああ、エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者。わたしは、めんどりがひなを翼の下に集めるように、あなたの子らを幾たび集めようとしたことか。それなのに、あなたがたはそれを好まなかった。見なさい。あなたがたの家は荒れ果てたままに残される。あなたがたに告げます。『祝福あれ。主の御名によって来られる方に。』とあなたがたが言うときまで、あなたがたは今後決してわたしを見ることはありません。」

エルサレムの神の家、神殿は彼らの世代に、紀元後 70 年にローマによって破壊されました。そして、この 26 節の言葉を発するのは、イエス様を再び見る時、すなわち再臨の時であります。この時に彼らはイエスが約束のメシヤであることを知り、激しく嘆き、悔い改めるのです。「ゼカリヤ 12:10 わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと哀願の霊を注ぐ。彼らは、自分た

ちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見、ひとり子を失って嘆くように、その者のために嘆き、初子を失って激しく泣くように、その者のために激しく泣く。」あまりにも不思議で、あまりにも深遠で、途方もつかない神の奥義です。さらに預言は続きます。

118:27 主は神であられ、私たちに光を与えられた。枝をもって、祭りの行列を組め。祭壇の角のところまで。

枝を持って、祭りの行列を組めとありますが、イエス様が入城される時に、これを群衆たちが行いました。仮庵の祭りの時に、彼らはナツメヤシやオリーブの木などの枝を取って、それで仮庵を作りますが、過越の祭りでもこの詩篇は歌います。そして、彼らはみなこれがメシヤ詩篇であることを知っています。それで、過越の祭りの前でも彼らはこの行為をイエス様に対して行なったのでした。

118:28 あなたは、私の神。私はあなたに感謝します。あなたは私の神、私はあなたをあがめます。  
118:29 主に感謝せよ。主はまことにいつくしみ深い。その恵みはとこしえまで。

主への感謝で、この賛歌は終わります。エジプトから出ていき、約束の地に入る時までの主のなされる御業をほめたたえ、その救いに感謝しています。そしてそれは、イスラエルの民にとって神の国に入る道程でもありました。しかし、その中にキリストがその指導者から拒まれることが含まれています。そして、25 節と 26 節には実に二千年の月日が経っています。私たちはその狭間に生きている恵みの時代にいます。ここで、私たちも人々から拒まれている、しかし私たちにとっては、命を与える生ける石であるのです。主が来られる日まで、私たちはこの方に死を宣べ伝えるのです。